

## 湯田豊先生のご停年退職 —ある時代の終わり—

三 星 宗 雄

湯田豊先生がご停年で神奈川大学を去られてから半年が経った。先生の輝かしい研究業績については多くの人々が知っているし、またこの特集号でも他に紹介があると思われるので、ここでは触れない（そもそも先生のご研究についてモノが言えるだけの力量が残念ながら私にはありません）。ここでは先生との個人的なつながりの中で、直観的にあるいはむしろ表面的に、感じたことについて書いてみたいと思う。それは湯田先生について書くと同時に自分自身について書くことにもなるのだが。

私は湯田先生とのお付き合い（失礼！でもお許しただけのことと確信します）の中でもっとも耳に残っているのは「テキストを読む」というお言葉である。私は実験心理学の出身なので、あまり「本」は読まず、個々の論文を読むことが多かった。「多かった」と過去形にしたのは今の私はそのどちらもやっていないからである。「テキストを読む」とは研究対象者の代表的な著作物の原著を細心の注意を払いつつ丹念に解釈し、分析することと言えるだろうか。

こうした仕事が学問の発展上きわめて重要なことは言うまでもない。こうして得られた知識の蓄積がやがてその学問領域の底辺を底上げし、また新しい進むべき道を照らすことになるのであろう。私の昔の指導教官が「心理学でもある数式で使われる定数の有効桁数がどこまでなのか決めることも大変重要なことだ」と話されたのを今でも忘れていない。コンピュータの性能を示す指標として $\pi$ （パイ）の有効桁数が話題になることも少くない。

実験系と文献系の違いはあるが、私の研究もこうしたものであった。「色覚メカニズムの研究」の名の下に、「閾値」を用いて「心理物理学的に」「 $\pi_4$ メカニズムと $\pi_5$ メカニズムの相互作用」が主なテーマであった（ここで言う $\pi$ メカニズムの $\pi$ は円周率とは無関係）。当時はその種のテーマだけで日本心理学会で一つのセッションができた。閾値の $0 \cdot 1$ （対数単位）の変化に胃の痛む思いをしたこともあった。

だが時代は動いた。生活人としてのおよび大学人としてのわれわれを取り巻く環境は変わった。今の風向きが一时的なものかも知れないと言われるのなら、今は湯田先生や私のような手法を用いる人間にとつては逆風となった。逆風状態にあるのは研究テーマの「テーマ」そのものという面もあろう。自然科学の領域としての色覚のメカニズムについては研究し尽くされてしまったという感はある。しかし湯田先生の研究テーマは、宗教の問題、ニーチェ、比較文明論……、どれをとつてもますます今日的でさえある。

あえて逆風状態と感ずるのは研究テーマの「研究」の方であるように思われる。いわば研究が「研究だけ」であつてはならない情況が生まれてきた。「テキストを読む」という手法は繰り返し返すが最も基本的で、最も重要なことである。以前アメリカ人の研究者（心理学者）に「日本人による研究にはオリジナリテイがないと言われる。あなた方はどこから発想を得るのか」と聞いたことがあつた。答えは「古典から」であつた。我が身の色覚研究について

言うなら、さしづめニュートンの『光学』かゲーテの『色彩論』などであろうか。あるいはギリシャのアリストテレス……。『テキストを読む』ことは少なくとも純粹に学問的な世界にあつては王道であろう。実験系で言えば「実験室で実験を繰り返す」ことである。

しかし今や世の中は応用の時代である。大学も大学の先生も「役に立つ」ことが要求される時代となった。あるいは大学が世の中の一般的なルールの中に組み込まれる時代となった。大学がホテルを経営する。大学内の技術移転やベンチャーの立ち上げはいたるところで聞かれるし、大学の先生が一般企業の取締役を兼ねるようなことも出現した。この四月には都内の某大学にNPOのプロフェッショナル育成を視野に入れたMBA（経営学修士）コースが設置された。まさに時代の動きと連動して発想せざるを得なくなったのである。

こうした時代にあつて大学の先生も行動せざるを得なくなった。もはやテキストの中あるいは実験室の中だけにとどまつてはられない状況なのである。哲学者と言えども今や書齋から抜け出て「病院を訪ねる」時代である（日経、二〇〇二年四月六日）。「原理を現実に対応させてきたこれまでの哲学……。これを逆転させ現場の問題から哲学を問い直してみる。（野家啓一、同）。私自身のテーマとの関わりで言えば、「現場」とは環境問題（騒色公害）ということになるか。「視環境（色彩環境）問題」から心理学を問い直してみる???（三星宗雄、未発表資料）。誤解のないようにあらためて書いておきたい。「テキストを読む」手法は誤りでも時代遅れでもまったくなく、むしろ学問の中で基本中の基本であつて、これは論理的に未来永劫不滅な手法であろう。ただ大学を取り巻く今の状況はそれだけではすまなくなつたと言いたいのである。

湯田先生はもちろんこんなことは百も承知であられると思う。私は先生のお考えをどこまで理解しているかまっ

たく自信がない。もし私の解釈が間違っていたり（テキストを正確に読んでいない）、あるいは私が知っているのは先生のほんの一部分であつて、先生の本当のかつ大部分の活動拠点は別の世界にあつたとしたら、心からお詫びをいたします。

湯田先生、ご停年退職、本当におめでとうございます。ここには書きませんでした。が個人的に数え切れないほどのご指導をいただきました。この紙面を借りて心から感謝いたします。私も逆風の中遅ればせながらアユミ始めました。あと半年間非常勤で来られますが、引き続きよろしくご指導願います。来年の三月にはあらためて感謝の意の総結集としてぜひ一緒に痛飲いたしたいと存じます。

（二〇〇二年九月十一日）